

敦煌懸泉漢簡に記録された大月氏の使者

小 谷 仲 男

はじめに

私の著述『大月氏』東方書店1999年（新装版2010年）では、私は1990年代に新発見があいっただアフガニスタン、パキスタンにおける考古学新資料をとりいれ、クシャン王朝の勃興とガンダーラ美術の歴史的背景について新しい見解を述べることができた。その後、北部アフガニスタンから発見されていたバクトリア語文書について、Sims-Williams 教授による解読成果が出版され、アフガニスタン北部に居住した人びとの社会が生き生きと知られるようになった（Sims-Williams 2000-12）。ただ、バクトリア語文書の書かれた時代は4-7世紀にわたり、大部分がイスラーム以前、キダーラ・クシャン朝からエフタル時代にかけてのものが主で、今回とりあげる大月氏・クシャン王朝以降の史料となるので、それは別の機会にとりあげたい。

2000年代になると、今度は大月氏・クシャン王朝に関わる新発見が中国側から提供されることになった。それは敦煌市の東64kmに存在した駅伝遺跡から発掘された大量の前漢時代の本簡である。その遺跡は「懸泉置」という名称を持ち、西域諸国と中国（長安）とを往来する使節を接待するために国家が設置した駅伝施設の一つである。「懸泉置」の「置」は公用旅券を所持する旅行者に宿舎、食事、交通手段などを供与する駅伝施設を意味した。遺跡から見つかった本簡に、懸泉置を通過した大月氏の使者が何度かにわたり記録されていた。歴史学から言えば、まさに大月氏についての同時代記録が出現したことになる。

懸泉遺跡の発掘 この遺跡の存在は1987-89年にかけての予備調査で確認され、その際、地表から60枚ほどの本簡が採集され、その中の一枚にすでに「大月氏」の文字が判読された。本格的な発掘調査は1990年10月から1992年12月まで継続された。遺跡の規模は土堀で囲まれた駅舎（50m×50m）、その南側に同じくらいの面積を占める厩舎などから構成されていた。駅舎の西側土堀の外には廃棄物の堆積した小丘（高さ約1.5m）があり、そこから本簡が幾層にも重なって発見された。それが懸泉漢簡の大部分を占め、保管期限の切れた記録文書の廃棄場所であった可能性がある。懸泉遺跡の標高は1,150m、冬季には積雪があり、本簡の保存には良好な環境といえず、出土本簡の整理、解明には時間がかかりそうである。現在もなお図版、釈文の最終報告書は出版されていない。

発掘成果の一部はまず、『文物』2000年5（月号）に「甘肅敦煌漢代懸泉置遺址発掘簡報」として出版された。出土本簡の総数は35,000本、そのうち文字の残るもの23,000本、さらに紀年をもつ本簡1,900点と報告された（『文物』2000-5）。一簡の大きさは長さ23-23.5cm、

幅0.6～1.2cm ものが多く、長さ23cm は漢代の1尺に相当する。なお、『文物』2000－5は上記の「発掘簡報」のほかに、木簡整理の中間報告として「敦煌懸泉漢簡内容概述」および「敦煌懸泉漢簡釈文選」の二篇が載せられる。「文選」には、木簡の内容が16項目に分類され、代表的な木簡の判読（釈文190点）と写真52点（図版1－7）が掲載され、その一項目に「関于西域」があり、西域に関する木簡25本の釈文が紹介されている。大月氏に関しては、「客大月氏，大宛，疎勒，于闐，莎車，渠勒，精絶，扞弥王使者十八貴人口人」（I 90DXT0309 ③：97）と記した木簡があった。西域諸国から派遣された使者の筆頭に「大月氏王の使者」が挙げられており、この懸泉置で接待を受けた時の記録であろう。これはのちほどまとめて解説する大月氏簡17本のうちの第10簡に該当する。

『文物』2000－5について、発掘者による『敦煌懸泉漢簡釈粹』2001年が出版された（以下、『釈粹』と略す）。そこには既出木簡とその後に整理された木簡約350本が取り上げられ、6項目の内容に分類され、No. 1～272件（幾本かの木簡を綴った冊書を含む）の判読（釈文）が公表された。懸泉木簡の全数量にはほど遠いとはいえ、かなりの量の新資料が公開されたことになる。しかし編者自身も述べるように、句読点、判読には暫定的なところがあり、今後修正される余地を残す。さらに残念なことは、ほとんどの木簡の写真図版が未発表であり、われわれが釈文を写真と照合して確認できる状態には至っていない。大月氏簡については上述の「客大月氏…」(no. 189)のほかに、no. 140と no. 203の2簡（大月氏簡の第9と第14簡）が加わった。

2004年になると、大月氏簡についての重要な整理成果が出版された。張徳芳（甘肅省文物考古研究所）「懸泉漢簡中若干西域資料考論」『中外關係史』科学出版社 2004の中の一文である。前半に康居に関するもの、後半に大月氏に関する木簡が集成されている。大月氏簡は既発表のものを含め17本見つかったという（第1簡～第17簡）。そのうち第3簡には表裏別種の大月氏記事が記されおり、正面、背（裏）面として表示する。最初に紀年のあるものを年代順に並べ（第1簡～第5簡）、そのあとに紀年を欠く木簡を列挙し、解説する。今回は、それぞれに図版が付されており、貴重である。ただ残念ながら写真は白黒印刷、しかも不鮮明である。それだけ木簡の保存状態が全体的に劣悪であることをうかがわせるものである。

I 懸泉出土の大月氏簡

まず大月氏簡の内容がどのようなものであるか。中国側から提供された釈文（判読）を読みながら考えてみよう。ただ、張徳芳のいう大月氏第1簡、神爵二年（前60）の紀年木簡は、その後の研究で釈文（判読）が大幅に修正され、釈文中から「大月氏」の文字が消滅していることに最近になって気づいた。（張俊民 2010：111, no. 72；116, no. 99による）。したがって現在のところ、紀年を持つ大月氏簡の最古のものは甘露二年（前52）の第2簡となる。ここでは便宜上、張徳芳（2004）の大月氏簡番号を踏襲することとし、まず紀年木簡の年代の古い順に、第2簡から第5簡までを検討し、ついで無紀年の大月氏簡、第6から17簡までを

16 (121)

検討したい。なお無紀年簡は出土地層による新古の推定により、古い順に配列されている。最初に釈文（原文）をあげ（句読点は筆者）、つぎに私の翻訳（試案）を掲げる。

大月氏 第2簡（V 92 DXT 1411②：35）

cf. 張徳芳 2005：73，図版－簡24（写真は簡23）；侯旭東 2008：37，no.3；張俊民 2010：112，no.79

上欄

甘露二年三月丙午，使主客郎中臣超承
制，詔侍御史曰，頃都内令霸・副侯忠，使送大月氏諸国客，與斥候張壽・侯尊俱
為駕二封軺傳，二人共載。

下欄

御属臣弘行御史大夫事，下扶風廐，承
書以次為駕，當舍傳舍，如律令。

翻訳：甘露二年（前52）三月丙午（17日）に，使主客郎中の臣超が承制し（皇帝の命令・許可を承け），侍御史に詔（みことのり）する。「このたび，都内令の覇および副侯の忠が使者となり，帰国する大月氏諸国の客人を送っていく。斥候の張壽と侯尊が同行する。かれらのために二頭立て，二人乗り馬車（二封軺伝，二人共載）を供与せよ。」（上欄）

御属の臣弘が御史大夫の事務を代行して扶風廐に命ずる。「この文書を受領すれば，関係機関は順次同様にして，馬車，宿舎，食事の便宜を規則どおりに供与せよ。」（下欄）

注釈

- 1 木簡に付された識別番号について。先頭のVは発掘区域（Ⅰ～Ⅴ区），92は発掘年度の1992年，DXは敦煌（Dunhuang）懸泉（Xuanquan）の頭文字，T1411は発掘トレンチの番号，②は発掘された層位番号（上から①～⑤），最後の数字35は同一層位から出土した木簡の通し番号である。
- 2 木簡には上下二段に分けて文書が書かれており，上欄，下欄で示した。それは通行人の所持する公用旅券の写し（懸泉置に残す控えの記録）である。第2簡の大きさは幅1.4cm，長さ23.5cm，上欄に3行56字，下欄には2行27字を書く。文字は隸書体の墨書である。
- 3 上下二段に分けて書く形式の簡（伝信＝公用旅券）は，原則として上欄に皇帝の「制（皇帝の許可・命令）」を承けた年月日と承制者名，それにもとづき，公用旅券を発給する担当部署名，出張する人物名とその身分と用務，本人が行く先々の宿泊地で受ける便宜供与の種類を記す。なお「臣超承制詔侍御史曰」は「臣下の超が制を承け，侍御史に詔（みことのり）して曰く」と訓読した。「承」と「制」（皇帝の許可・命令）の字の間で，文章が改行され，皇帝に対する敬意を表す。以下，大月氏第3簡裏面，旧大月氏第1簡，烏孫関係の第5，6簡も同様の形式である。ただ，張俊民（2010）の本簡釈文では，「制」を他の行より一字上げ，さらに「制」と「詔」間を一字空白（空格）にしている。しかし，図版（張徳芳 2005）で見る限り，改行のみである（侯旭東 2008：10「換行平抬」参照）。

懸泉漢簡のうち、「制」字を改行し、他の行よりも一字（単抬）あるいは二字（双抬）上げて書く抬頭の実例は、張德芳（2005）の図版中、簡28、簡29で見ることができる。

- 4 下欄は涉外担当部署（御史）の最高責任者である御史大夫あるいはその代行者が、上欄の便宜供与を規則どおりに実施することを各県の関係機関に命ずる文書である。この場合は宛先が「扶風廐」となっている。長安を出て西に向かう旅人が最初に到着する扶風県の宿泊地である。しかし「承書以次為駕…」と記されているように、以下西方の関係機関に対しても、同様の便宜供与を行うように命じた文書である。つまり、旅行者（出張を命ぜられた者）がこの木簡（伝信）を携えれば、公用による旅行者として見なされ、馬車、宿泊、食事が無料で供与される。公用旅券（パスポート official passport）である。
- 5 交通手段としての馬車と伝信の封泥の数について。公用の使者に供与される馬車の種類は、本人の所持する公用旅券（伝信）に指示されるが、それは伝信に付された御史大夫の印章（封印、封泥）の数によって示される。漢代の律文によると「其乗伝、参（三）封之……軺伝、両馬再（二）封之、一馬一封也」（『漢書』平帝紀、如淳注に引用、標点本：360）。上記の木簡の場合、「為駕二封軺伝」と記しており、「二頭立ての馬車を駕（乗り物）として供与せよ」の意味となる。また、別の律文（『漢書』高帝紀、如淳注に引用、標点本：57）には「四馬高足為置伝、四馬中足為馳伝、四馬下足為乗伝、一馬・二馬為軺伝、急者乗一乗伝」とあり、馬車には牽引する馬の頭数によって4頭立て（「乗伝（下足）」、「馳伝（中足）」、「置伝（高足）」）、2頭立て（軺伝）、1頭立て（軺伝）の3種類があり、4頭立ての馬車には、速度能力によってさらに3種に区別されていたことがわかる。また急用の時は早馬を乗り継いでいくという（乗一乗伝）（富谷至 2010：262－4 など参照）。
- 6 懸泉遺跡出土の木簡は伝信（公用旅券）の写し（控え）であるので、封泥は存在しない。律文に規定されているように、本人の携える原本の「伝信」は長さ一尺五寸の木簡に記され、封印され、封泥の上に御史大夫の印章が押されたものである。ところが各関係機関でその控えの記録を取るということは、そのつど封印を破り、開封したのかどうかという疑問がわく。私は旅行者がはじめから開封したものと封印した伝信の両方をセットで持ち歩いたのではないかと推量する。最近アフガニスタン北部で発見された150点ほどのバクトリア語文書（羊皮紙）にも同様なケースがある。契約文書の場合、縦長の羊皮紙の上下に同じ内容の契約文書を書き、上の半分は巻いて紐で縛り、幾か所かを封泥で封じ、当該関係者、立会人がそれに印章を押す。下の文書はオープンである。もし契約書に疑義が生じた時には、裁判所で封印を破り上下文書を照合し、内容を確認するものである。木簡と羊皮紙とは同じ方法がとりにくい可能性があるが、封印・封泥の形態は同じで、興味深い問題である（Sims-Williams 2012：『図版』 pls. 22－23 など）。

つぎは大月氏第3簡である。木簡の表裏に別々の文書の控えが記されるという珍しい例である。紀年は裏面（前47年）のほうが古いが、表面（前43年）に書かれた文書とされるものから先に検討する。両方とも上下二段に分かれて記される形式で、公用旅券であるが、ただ、

書式が第2簡と若干異なる点が注目される。

大月氏 第3簡 (V 92 DXT 1210 ③ : 132)

cf. 侯旭東 2008 : 46, no. 73 ; 張俊民 2008 : 129, no. 69 ; 張俊民 2010 : 116, no. 96

表面上欄

使大月氏副右將軍史柏聖忠，將大月氏雙靡
翁侯使者萬若山，副使蘇贛，皆奉獻言事，詣
在所，以令為駕一乘傳。

表面下欄

永光元年四月壬寅朔壬寅，敦煌太守千秋，長史章，倉
長光，兼行丞事，謂敦煌，以次為駕，當（舍）傳舍
如律令。四月丙午過東

翻訳：大月氏へ使者として派遣された副右將軍史の柏聖忠が帰国に際し，大月氏雙靡翁侯の使者萬若山と副使の蘇贛を連れてきた。みな朝貢目的と言い，長安の朝廷（在所）に参詣する。「令」により，かれらのために一頭立て馬車（為駕一乘伝）を供与せよ。（上欄）

永光元年（前43）四月壬寅（丁酉？）朔壬寅（6日），敦煌太守の千秋，および長史の章と倉長の光が丞の任務を代行し，敦煌県に謂う。「関係機関は順次同様にして，馬車，宿舎，食事の便宜を規則どおりに供与せよ。」〈四月丙午（10日）東に向かって出発〉（下欄）

注釈

- 1 第2簡の中央政庁の御史台が発給する公用旅券とは異なり，これは地方官府の敦煌太守が発給した公用旅券である。つまり公用旅券の伝信は郡や県においても発給した。上欄には旅行者の名前と身分，用件が記され，交通手段の便宜供与の種類が示される。発給の年月日は下欄に移され，つづいて発給者名（敦煌郡太守の千秋），最初の発給先（敦煌県），それ以後の関係機関への同様な便宜供与が命ぜられる。〈四月丙午過東〉は伝信の本文ではなく，懸泉置役人の付記したものであり，訳文には〈……〉で示した。以下同じ扱い。
- 2 中国西北方面で施行された伝信（公用旅券）を分類した侯旭東（2008）によると，中央政庁（御史大夫）発行の伝信には，皇帝の裁可（制）を受けて発給したもの（承制簽発）と，「制」を受けずに御史から直接発給されたもの（非承制簽発）の二形式があり，地方発給の伝信では「以令為駕」の表現を持つもの，そうでないものが区別できるとする。上の第3簡表面の伝信は前者に該当する。「以令」とするのは，律令の規定によるもので，皇帝あるいは朝廷に関わる用件の使者などに対し，郡太守，都尉が発給する場合である。さらに侯旭東の研究によれば，地方発給の伝信に付される年月日は，本簡やつぎの第4簡「建昭二年三月癸巳朔辛丑」のように，月のあとに「朔（一日）」の干支を入れるが，中央発給の文書には「月朔」を入れることがない指摘する（侯旭東 2008 : 8 - 10）。理由はともかく，興味深い指摘であり，断片木簡の識別に有効である。
- 3 この簡の旅行者のなかに大月氏の「雙靡翁侯」の使者が含まれることは，私たちの驚き

である。第4簡にも大月氏「休密翁侯」の使者が記され、大月氏王とその五翁侯との関係を考える新資料として、後ほど詳しく取り上げたい。なお、張德芳の釈文は使者の名前を「萬若山」ではなく、「萬若」と読み、「山副使…」とする。理由は『漢書』西域伝に記述される諸国中に「山国」という戸数450の小国が存在し（標点本：3921）、そのため「山国の副使者」の意味に解釈したのである。どちらがよいのか判断できず、保留にしたい。

裏面上欄 (cf. 張俊民 2010：109, no. 54)

初元二年七月戊辰，使□□□□者□□□中郎丞謹承
制，詔侍御史□，□□大月氏□□□臣副意，與斥候
□敞・趙□□，為駕二封軺傳，二人共載。

裏面下欄

御史〔大夫萬年〕，下扶風廐，以次為駕，當舍傳舍，如律令。

四月丙寅過東

翻訳：初元二年（前47）七月戊辰（10日），使□□□□者□□□中郎丞の謹が承制し，侍御史□□に詔（みことのり）する。「（当人は）使者として大月氏諸国客を送っていく臣副意であり，斥候の□敞，趙□とが同行する。かれらのために二頭立て二人乗りの馬車（二封軺車）を供与せよ。」（上欄）

御史大夫の萬年が扶風廐に命ずる。「関係機関は順次同様に，馬車，宿舎，食事の便宜を規則どおりに供与せよ。」〈四月丙寅，東に向かって出発した〉（下欄）

注釈

- 1 上欄2行目の判読できなかった文字について「侍御史〔曰，使送〕大月氏〔諸国客〕…」，3行目「□敞・趙□，〔俱〕，…」と第2簡の例に倣って復元し，翻訳した。下欄の「御史」とあるのは，御史大夫の略称であり，在位年代から見て当時の御史大夫は陳萬年であるので，それを補った（張俊民 2010：100参照）。
- 2 この伝信（公用旅券）は確かに中央政庁の御史大夫が発給したものである。この伝信を携えた本人は大月氏ほか西域諸国の客人たちが本国へ帰るのを送っていく任務を帯びた。その制詔が下された日付は「初元二年（前47）七月戊辰」であった。それから数か月後に本人が懸泉置を通過し，宿泊，食事の接待を受けて，さらに西に向かって出発したはずである。ところが懸泉置における本人の伝信写しの記録には，〈四月丙寅過東（東に向かって出発した）〉と添え書きがある。これは本人が大月氏使者を本国まで送り届け，帰国途上，再び懸泉置で宿泊した時の記録である。では「四月丙寅」とあるのは何年のことか。私ははじめ初元二年の翌年（前46年）の四月丙寅と考えたが，その年の四月一日（朔）の干支は乙酉であり，その月の丙寅は存在しない。もし本人の西域諸国の客人の送迎が種々の事情で4年近い期間に及んだとすれば，木簡表面の紀年と同じ永光元年となり，永光元年（前43）四月丙寅は四月三十日となる。もしそれならば，裏面の記録記事は表面のそれより20日ほど遅れる記録となり，両者が表裏に書き記された理由もある程度説明がつく。

大月氏 第4簡 (Ⅱ 90 DXT 0216 ② : 702) cf. 張俊民 2008 : 130, no. 79

上欄

□□□遣守候李□送自來大月氏休密翕侯，
 □□□国貴人，□□国貴人，□□□□□彌勒彌□
 □□□□烏孫国客，皆奉獻詣。
 ……三月戊申東

下欄

建昭二年三月癸巳朔辛丑，敦煌太守彊，長史 [章]，
 守部候脩仁行丞事，謂敦煌，以次為駕，如律令。

翻訳：敦煌太守が守候の李□を派遣し，自発的に朝貢に来た大月氏休密翕侯，および□□□
 国貴人，□□国貴人，□□□□□彌勒彌□，□□□□□烏孫国客を送迎させる。みな朝貢
 を目的として（長安へ）参詣する。〈三月戊申（16日）東に向かって出発〉（上欄）

建昭二年（前37年）三月癸巳朔辛丑（9日），敦煌太守の彊，および長史 [章]，守部候の
 脩仁が丞の任務を代行して，敦煌（県）に謂う。「以下，関係機関は順次同様に，馬車の便
 宜を規則どおりに供与せよ。」（下欄）

注釈：この簡は，自発的に朝貢目的で敦煌にまで来た大月氏休密翕侯ほか西域諸国の使者に
 たいして，敦煌郡の太守が役人（守候）の李□を派遣し，首都長安まで送迎させる。そのた
 めに発給した伝信（公用旅券）である。第三簡，表面の伝信と同じく，地方官府が発給した
 伝信の例であるが，今回は「以令為駕」の表現はない。

つぎの第5簡以下は，懸泉置における事務管理の記録簿の一部あるいはその断簡が大部分
 である。とくに冒頭に「入」，「出」の字がきてそのあとに品数（粟量，馬匹など）がつづく
 ものは，物品の収入と支出を記録した出納簿であることがわかる。食品は宿泊者の食事，馬
 は公用旅行者の送迎に供与されたもの。紀年のあるのは，第5簡のみである。

大月氏 第5簡 (Ⅱ 90 DXT 0214 ② : 241)

入粟三斗 馬二匹 鴻嘉三年閏月乙亥，敦煌廩官章奴受縣（懸）泉嗇夫長，送 大月氏…
 （粟三斗および馬二匹，鴻嘉三年（前18）閏月乙亥に，敦煌県廩官の章奴が懸泉嗇夫長に授
 与し，大月氏使者を送らせる…？）

大月氏 第6簡 (Ⅰ 90DXT0114 ③ : 145)

出馬五十六匹，送大月氏□張千父計□□□
 （馬五十六匹を供与，大月氏□（客）の長千父，計…を送るため）

大月氏 第7簡 (Ⅰ 91DXT0309 ③ : 98)

歸義大月氏貴人一人，貴人美一人，男一人，自來龜茲王使者二人，□□三人，凡八人
 （自発的に中国に投降した大月氏貴人一人とその子ども男女，自発的に朝貢に来た龜茲（ク
 チャ）王の使者二人，□□三人，計八人） **注釈**：懸泉置で接待した人びとの名簿である。

大月氏 第8簡 (V 92DXT1511 ④：2)

使大月氏□司馬 (大月氏に使者となっていく□(大)司馬…)

大月氏 第9簡 (IV 92DXT1712 ⑤：1) cf.『釈粹』：143, no. 203

出粟四斗八升 以食守属唐霸所送烏孫大昆彌，大月氏，所□

(粟四斗八升を支出，守属の唐霸が送迎する烏孫大昆彌と大月氏…に食事を供与するため)

大月氏 第10簡 (I 91DXT0309 ③：97) cf.『文物』2000-5：40,『釈粹』：133, no. 189

客大月氏，大宛，疎勒，于闐，莎車，渠勒，精絶，扞彌王使者十八貴人□人

翻訳：大月氏，大宛（フェルガナ），疎勒（カシュガル），于闐（ホータン），渠勒（コルラ），精絶（ニヤ），扞彌（ホタン東方のラワク？）の各王使者十八，貴人□人

注釈：懸泉置において接待した西域王国の使者の名簿（？）

大月氏 第11簡 (I 92DXT1311 ③：129)

校尉丞義，使送大月氏諸国客，従者一人，凡二人，一食，三升，東

(校尉丞義が大月氏と諸国客を送って帰国，従者一人，計二人。一食三升。東へ出発)

大月氏 第12簡 (V 92DXT1210 ③：97)

四封章破詣府

合檄一詣府掾

一封廣校候印詣府

正月丁亥日未入，出西界

西書十四封合檄一

四封都尉印詣府

・東界毋券刻案之

西書三封

一封河内詣郡倉

一封章破詣使送大月氏使者

注釈

この木簡は幅広であり，「牘」とも呼ばれる形式。長12.7cm（下部欠損），幅1.9cm。懸泉置の中に設置された郵便物の中継部署（駅）において，受け渡しした手紙（郵書）の記録帳簿である。最上欄に大きな文字で，「西書」と書く。つまり東から運ばれ，西へリレーされる郵便物，その総数が封緘（封）されたもの14通，封のないもの（檄）1通，であることを示す。下欄三段はその内訳であり，差出人の名前や官職，印，および宛先が「詣」の字で示される。宛先が「府」，「郡」とあるのは，この場合は敦煌郡，敦煌太守の府のことである。その他，受け渡しの日付が示されることがあるが，何年であるか不明。大月氏の名称は最後に記された「章破が大月氏使者を送迎する役人に宛てた」もの1通である。

大月氏 第13簡 (V 92DXT1311 ③：140)

出粟三升 以食守属因送大月氏客，一食，三升，西

(粟，三升支出 守属の因が大月氏客人を送迎するさいの食事用，一食三升。西へ出発)

大月氏 第14簡 (II 90DXT0214 ①：126) cf.『釈粹』：106, no. 140

出粟一斗八升 (六石八斗四升)

(五石九斗四升) 以食守属周生廣送自來大月氏使者，積六食，三升

粟，一斗八升支出 守属周生廣が自発的に朝貢に来た大月氏使者を送迎するさいの食事用，

一食につき三升，六食分の合計。 注釈：（ ）のなかの2行と本文との関係は不明。

大月氏 第15簡 (87~89 DXC : 39)

大月□禹一食，西送大月氏副使者

(大月氏禹の食事一回分。大月氏副使を送って西に向って出発)

注釈：1987~89年度の予備調査の際に地表より採集されたもので，すでに『敦煌漢簡』1991：上巻 p. 270 (釈文)；下巻，図版119，no. 1328に掲載されていた。

大月氏 第16簡 (I 91DXT0405 ④ A : 22)

府移玉門書曰，降歸義大月氏聞湏勒等…

(敦煌郡府が玉門へ文書を送り，謂う。「自発的に投降した大月氏の聞湏勒などが…」)

大月氏 第17簡 (II 90DXT0114 ③ : 273)

大月氏王副使者一人… (大月氏王の副使者一人…)

以上で大月氏簡の総数16本(17件)の検討を終えた。将来，懸泉漢簡が整理されるにしたがい，上述の簡に連続する簡の発見や，新たな大月氏簡が増加する可能性があるが，現在，知られるのは以上である。紀年のない簡の年代推定は，識別番号につく層位①~⑤によってある程度推定が可能であるが，決定的ではない。書体による新古の判定は，今のところなされていないし，判別は容易ではなさそうである。しかし，張俊民による懸泉漢簡に登場する人名の収集と分析の一連の研究は，大きな成果を上げているようにおもう(張俊民 2006-2012年)。人名を手がかりに無紀年簡の年代を推定することが可能となり，関連の簡が引き出しうる。今後，懸泉漢簡の研究に大きな方向性を与えるものと注目したい。

II 懸泉漢簡に記録された漢と烏孫の交渉

最初のところで述べたように，張徳芳が懸泉漢簡から発見した大月氏簡17本うちの，最も古い紀年である神爵二年(前60)をもつ第一簡は実は誤読であったとされた。修正された釈文と翻訳は下記ようになる。

大月氏の旧第1簡(修正釈文)(I 91DXT 0309 ③ : 59 ; 張俊民 2010 : 111, no. 72)

上欄

神爵二年四月戊戌，大司馬車騎將軍臣〔増〕承

制，詔侍御史曰，使烏孫長〔羅侯〕，君長富侯臣或，與斥候王利国侯君周国假長

萬□□中樂安世陳蓋衆□□□，□延年奉□迎。

為駕二封軺傳十人共傳，二人共載。十月□

下欄

御史大夫〔吉〕下扶風廐，承書

以次為駕，當舍傳舍，如律令。

翻訳：神爵二年(前60)四月戊戌(23日)，大司馬・車騎將軍の臣韓増が承制し，侍御史に

詔（みことのり）する。「長羅侯と君長富侯の臣或とが烏孫への使者となり、斥候王利，国侯君周，国假長萬□□，中樂安世，陳蓋衆が同行し□□□，□（杜）延年が（書）を奉じて迎える。かれら十人のために二頭立て二人乗りの馬車（二封軺伝）を便宜供与せよ。」〈十月□（西）に向かって出発〉（上欄）

御史大夫の丙吉が扶風廐に命ず。「この文書を受領すれば，以下，関係機関は順次同様にして，馬車，宿泊，食事の便宜を規則どおりに供与せよ。」（下欄）

大月氏第2簡と第3簡裏面でみたように，中央政庁の御史大夫によって発給された公用旅券（伝信），とくに皇帝の制を承けた人物が侍御史に詔を伝授するのは，大月氏第2簡と同じ形式である。この簡の最初の釈文（張徳芳 2004）は「侍御史曰使」の五字を「請□大月氏」と誤読していたのである。現在では烏孫のみに関する簡となった。いま懸泉漢簡中の烏孫簡と大月氏簡の数量を比較すると，烏孫簡32余件（冊書を1件と数える），大月氏簡17件（表裏を2件と数える）と，烏孫関係が圧倒的に多いことがわかる。これを甘露二年（前52）以前の紀年簡に限って比較すると，烏孫簡10件に対して大月氏簡1件となり，その差がより顕著となる。これは何を意味するのか。もちろん木簡の保存状況にも左右される問題ではあるが，漢王朝と大月氏との交流が頻繁となる以前，漢王朝と烏孫とのあいだの交渉が，いかに頻繁に行われたかが察せられる数値である。その観点で『史記』大宛伝や『漢書』西域伝を読みなおしてみると，以下のような背景が浮かび上がってくる。

その発端は，張騫が武帝から大夏（大月氏が遷移したバクトリア，現アフガニスタン北部）に関して尋ねられた時のこと，張騫が「匈奴の右臂を断つ」という新たな策を進言したことにはじまる。前119年の頃である。それはいったいどのような策なのか。

「文明度の低い異民族の習俗として，漢の財物に対しては貪欲であります。今，この機会に乗じて莫大な財幣を烏孫に贈り，これまで以上に東方に招きよせ，もと匈奴渾邪王が占拠していた土地に住まわせ，漢と兄弟の関係を結ぶならば，漢のいうことを聴くようになり，聴きいれるならば，匈奴の右臂を断ちきった（断匈奴右臂）のと同然です。そのようにして烏孫と連合してしまえば，それより西方の大夏などの諸国は，みな招きよせ，漢の外臣とすることができましょう。」（『史記』卷123大宛伝，標点本：3168）

かつて張騫は武帝の命令を受け，はるばるアム・ダリヤ（オクサス・嬌水）流域に大月氏を訪ね，漢と大月氏とで匈奴を挟撃する軍事同盟をもちかけたことがあった。大月氏とは匈奴に敗れ，中国の西辺からパミール高原を越え，そちらへ移動した遊牧民族月氏の本体といわれる。張騫の旅行は匈奴に妨害され，往復13年を要したが，無事帰国した（前139－126年）。しかし大月氏には同盟の意志はなく，匈奴挟撃作戦は不首尾に終わった。

その間，武帝は張騫の帰りを待ちきれず，万里の長城を越えて匈奴討伐を断行し，ある程度の戦果を挙げたが，依然として匈奴の勢力は強く，漢の犠牲も大きかった。張騫は長年の経験から，匈奴は西域諸国を支配することによって莫大な通商税を獲得し，それが匈奴の強さを支えていると判断した。確かに月氏がかつてそうであり，今，匈奴がそれに取って代わっ

たのである。西域はいわば、かれらのドル箱（資金源）であった。西域から匈奴を閉めだすことができれば、匈奴は半身不随に陥るだろうと。匈奴は右手でドル箱の西域を掌握し、その財力でもって漢にたいし武力攻撃しているのだから。武帝は張騫の献策に期待を示し、さっそく烏孫対策の実行に取りかかった。

武帝は張騫に兵300人を護衛につけ、烏孫王への贈物として巨万の金や絹をたずさえさせ、同時に多くの副使を伴わせた。張騫は烏孫に到着し、王に面会すると、「烏孫が東方の匈奴王渾邪の旧領地に移り住むならば、漢は皇室の娘を烏孫王の妻として送りましょう」といった。しかし大臣たちはなお匈奴の力を恐れており、国王は年老いていたので、決断できなかった。張騫はそこで帰国にあたり、烏孫の人びとに漢の地大物博なることを知らせようと、烏孫の使者数十人を連れ帰ることにし、また同伴した副使たちを烏孫から大宛（フェルガナ）、康居（ソグド）、大月氏、安息（パルチア）、身毒（インド）などの諸国を探訪させることにした。張騫は烏孫から帰国し、一年あまりして病没した（前113年）。張騫自身は献策の進展を見ることはできなかったが、その効果は徐々にあらわれた。西域諸国に派遣された副使たちは、それぞれの国の使者を伴って中国へ戻ってきた。そのなかに大月氏使者の第一号が存在したかもしれない。一方、中国へ来た烏孫の使者は漢の人口が多く、物資の豊かなのを見て、国に帰って報告した。その効果もあって、こんどは烏孫側から公主を王の配偶者としていと申し入れてきた。烏孫は千匹のウマを漢に結納として贈り、漢は江都王建の娘、名前は細君を公主として烏孫王昆莫に降嫁した（元封三年、前108頃）。その後、細君は烏孫王昆莫が年老いたとして、烏孫の風習に従って、孫の岑娶の妻にさせられた。細君はさいごまで遊牧民烏孫の生活になじめず、悲嘆のあまり、「黄鵠（はくちょう）となって故郷へ帰りたい」とうたった。その「黄鵠歌」が『漢書』西域伝（標点本：3903）に載せられている。

烏孫と漢との兄弟分とした関係が成立したとはいえ、西域における漢・匈奴の力関係はさほど変わらなかった。匈奴は漢が公主を烏孫に与えたと聞くと、匈奴の王女を送って昆莫の妻とした。昆莫は中国公主を右夫人とし、匈奴妻を左夫人としたという。大国の板挟みになった烏孫の状況をよく象徴する。その後、漢は引き続き、烏孫を足がかりとして西域諸国に使者を派遣した。近国への使者は数年、遠国に派遣された使者は八、九年を費やして帰ってきたという。使者は道中で苦勞が絶えなかった。一方、匈奴の使者が匈奴单于の親書を携えさえすれば、どの国もウマや食事、宿舎を供与した。しかし漢の使者はそのような便宜を受けようとすれば有料であり、ときには拒否さえされた。匈奴のほう西域諸国では漢よりも畏れられていたのである（『史記』大宛伝、標点本：3173）。

そうしたなか、貳師將軍の李広利が大宛国（フェルガナ）の討伐に派遣され、二度の遠征の末、ようやく服従させることができた（前102年）。李広利はその功績で海西侯に封ぜられた。そのときの詔の中で、武帝は「匈奴の妨害はすでに久しい。今、匈奴はゴビ砂漠の北に退去したとはいえ、近隣の諸国と共謀し、大月氏使者の通交を遮断しようとしている（匈奴為害久矣。今雖徙幕北，與旁国謀共要絶大月氏使）」（『漢書』卷61 李広利伝：2703）と述べ

る。当時、大月氏の使者が中国へ到達することは容易なことではなかったのである。

烏孫公主の細君は悲嘆にくれる生活の中、烏孫の地で亡くなった（前103年ころ）。漢はその後任に楚王戊の孫娘解憂を公主として送り、岑陬の妻とした。その岑陬も10年余りで死没した（前93年ころ）。岑陬と匈奴妻の間にできた泥靡はまだ幼さなかったので、岑陬は死に臨んで、叔父の子翁歸靡に王位を譲り、「泥靡が成長すれば、王位をかれに返してやってくれ」と遺言した。新たに国王となった翁歸靡は解憂を妻とし、二人のあいだに三男二女が生まれることになる。

武帝亡き後、しばらく経過したころ、烏孫に取り残された解憂公主から立て続けに救助要請の手紙が皇帝のもとに届いた。匈奴の侵略が激しくなっているという内容であった。昭帝（前86-74）は対策を立てられないままに死去し、ついで即位した宣帝（前73-49）にはさらに詳しい報告が烏孫王からも届いた。

匈奴は今また、しきりに大軍をくりだして烏孫を攻撃しております。車延・悪師の地を奪い、人民を連れ去り、使者を派遣して烏孫公主を差し出せとまで言ってきました。漢との関係を断絶させようとするのでしょうか。私、翁昆彌は国の大半の精兵を徴発し、人馬五万騎を自給できます。全力で匈奴を攻撃する所存でありますので、どうか天子さまも軍隊を出して公主ならびに私、翁昆彌をお救いください。（匈奴復連発大兵侵撃烏孫，取車延，悪師地，収人民去，使使謂烏孫趣持公主來，欲隔絶漢。昆彌願発国半精兵，自給人馬五万騎，尽力撃匈奴。唯天子出兵以救公主，昆彌。）（『漢書』西域伝，下，烏孫国条：3905）

本始二年（前72）、宣帝は総勢15万騎の軍隊を匈奴向け出動させることを決断した。五人の将軍にそれぞれ3万騎を率いさせ、別々の方面から同時に匈奴に対してして進撃させた。烏孫の軍隊に対しては校尉の常恵を派遣してその保護にあたらせ、西方から進撃させた。匈奴は漢の大軍が出撃して来るのを察知し、家畜を駆りたてて遠くへ逃走したので、五将軍の戦果は僅少であった。一方、校尉常恵に伴われた烏孫の軍隊は右谷蠡王の王庭にまで進攻し、多くの匈奴の首領と家畜とを捕獲して烏孫に凱旋した。常恵はその功績で翌年、長羅侯に封ぜられ、功労のあった烏孫の貴人たちに金幣を賜与するため再び烏孫に派遣された。

最近の懸泉木簡の研究において、本始五年（前69）の紀年簡で、長羅侯の名を記す木簡が見つかった。これまで知られた烏孫関係の紀年木簡のなかで、最も古くにさかのぼる。

(1) 入麋小石二石 本始五年二月乙卯、懸泉廐左廣意受敦煌倉齋夫、過送長羅令史。

（廐，小石で二石を受領。本始五年二月乙卯に懸泉置廐左の廣意が敦煌県の倉齋夫から受領して、長羅侯令史を送迎、接待する。）（I 90 DXT209⑤：17；張俊民 2012：184，No. 66）

この木簡に書かれた長羅令史とは、長羅侯常恵自身ではないが、年代から見て長羅侯が烏孫に出向き、さきの匈奴討伐における論功行賞を行った時、それに同行した部下の一人であろうか。その後しばらくは、烏孫の動静が伝わってこない。匈奴の脅威が収まったせいかな。

しかし、元康二年（前64）になって烏孫国王の翁歸彌が長羅侯常恵を介して、次のような書簡を皇帝に奉った。

願わくは漢の外孫である元貴靡を世継ぎとし、ふたたび漢の公主を娶らせ、姻戚関係をさらに強固なものにし、匈奴と絶縁する所存です。どうか結納として馬と騾馬各千匹を贈らせていただきたい。（願以漢外孫元貴靡為嗣，得令復尚漢公主，結婚重親，畔絶匈奴，願聘馬羸各千匹。）（『漢書』西域伝下，烏孫国条：3905）

さきに公主解憂が烏孫王の翁歸彌と再婚し（前93年ころ）、三男二女を生んだことを述べた。元康二年、長男の元貴靡は妻を迎えるまでに十分に成長していたのである。朝廷内では大鴻臚の蕭望之のように反対する人物もいたが、宣帝はこれまでの烏孫との通婚関係を尊重する立場から、使者を烏孫に派遣して結納を受け取らせた。そして現公主解憂の弟の子相夫を新たな公主（少主）とし、長羅侯光禄大夫常恵らをつきそわせて烏孫に送って行かせた。ところが一行が敦煌まで来たときに、烏孫国王の翁歸彌が死没したという知らせが来た（前60年、神爵二年）。そればかりか、烏孫の国人は先王との約束に従って、岑陬の子の泥靡（狂王）を王位につけた。泥靡の母は匈奴人である。公主解憂と長羅侯常恵が念入りに画策したとおもえる烏孫の親漢政権樹立は頓挫した。新公主は敦煌から長安に引き返さざるを得なかった。

再び懸泉漢簡を参照すると、烏孫の結納を受け取りに出かけた漢の使者に関する木簡が見つかっている（張徳芳『文物』2000-9：91-92，Nos. 1-18，19，20；『釈粹』：nos. 213，212）。

(2) 懸泉置元康五年正月過長羅侯費用簿，縣掾延年過

（懸泉置，元康五年正月において長羅侯を接待した費用簿，縣掾の〔王〕延年が接待。）

（I 90DXT0112③：61-78，上記は表題の簡であり，全体としては，18本の簡からなる冊子）

(3) 神爵二年正月丁未朔己酉，懸泉置嗇夫弘敢言之。遣佐長富将伝迎長羅侯，敦煌粟小石九

石六斗簿入十月。今敦煌音言不簿入。謹問佐長富，粟小石九石六斗。今移券致敦煌□

翻訳：神爵二年（前60）正月丁未朔己酉，懸泉置の嗇夫の弘が申し上げます。「佐長の富に伝信を持たせ，敦煌に派遣して長羅侯を出迎えさせました。その際，敦煌県から小石九石六斗の粟を支給され，出納簿に記入しました。それは神爵元年十月のことです。ところが今，敦煌県の音から帳簿に記入がないとの指摘を受け，佐長の富に問い合わせたところ，確かに小石九石六斗を支給されたということなので，今，その証明文書（券）を敦煌県に送ります。」（I 91DXT0309③：215；参照 I 91DXT0309③：188）

上の二種の簡から，新公主（少主）の結納を受け取るために烏孫に赴いたのは長羅侯常恵をはじめとする使者たちであり，元康五年正月（前61，三月に神爵元年に改元），懸泉置で

宿泊、食事の接待を受けて烏孫に向かい、そして帰途、同年十月にふたたび懸泉置を通過して長安に向かったことがわかる。『漢書』西域伝には、いつ烏孫へ結納を受け取りに出かけたのか年月は記されていない。

では、いつ新公主を烏孫へ送って行ったかについては、『漢書』巻78、蕭望之伝に記載があり、月日は明言されていないが、神爵二年（前60）のこととする（『漢書』標点本：3279）。懸泉木簡にそれに関するものを探すとすれば、この章の最初に挙げた神爵二年の「旧大月氏第一簡」が該当しよう。修正された釈文によると、それは烏孫に出張する長羅侯常恵をはじめとする人々に発給されたパスポート（伝信）である。上欄の記載によると皇帝の詔は神爵二年四月に下され、下欄に記す御史大夫（丙吉）の下す命令には、最初に通過する関係機関として「扶風廐」が記されており、長安から西行するためのパスポートであることがわかる。その控えを取った懸泉置の木簡には「10月□」と添え書きがあり、それは10月に一行が懸泉置を出発して西に向かったことを示す。ところが、さきに述べたように敦煌に到着すると、烏孫王翁歸彌の死亡の知らせが入り、この婚礼は中止となり、一行は長安に引き返す。

懸泉木簡には「少主」と「長羅侯」の名称を記す断簡が見つかっている。

(4) … 懸泉置，度侍少主・長羅侯，用吏…（懸泉置は少主と長羅侯を送迎，接待するのに，必要な人員…）（Ⅱ 90 DXT00214②：298，張徳芳『文物』2000－9：93，No.21；『釈粹』：no.196）。

それが往路のどちらであるか不明であるが、少主を烏孫へ送る一行に関する木簡である。

その後、解憂公主は烏孫の慣習（レヴィレート婚）に従って、泥靡（狂王）の妻とならざるを得なくなり、匈奴系烏孫の勢いが増大したとおもわれる。漢はそれにたいしてどのように巻き返しをはかるのか。

当時、長安には烏孫王の子どもひとりが侍子として留められていた。そこで漢は衛司馬の魏和意とその副官の任昌に命じて、その烏孫侍子が帰国するのを送らせるという名目で烏孫に派遣した。公主解憂の手引きがあったとおもわれるが、かれらは酒宴の席を設け、泥靡（狂王）を招いた。宴会が終わる頃を見計らって、烏孫王（泥靡）を暗殺しようとした。しかし剣がそれで、泥靡は傷つきながら馬に乗って逃れ去った。泥靡の子の細沈瘦が兵を集めて魏和意、任昌および公主を赤谷城（烏孫都城）に閉じ込め、包囲した。包囲は数カ月続いたが、西域都護の丙吉が西域諸国の軍隊をくりだし、ようやく包囲がとけた。漢朝廷は中郎将張遵を派遣し泥靡を見舞い、医薬を持参して泥靡の傷を治療し、金二十斤と絹を下賜した。同時に魏和意と任昌を捕えて鎖でつなぎ、囚人車で長安に送りかえし、斬罪の刑に処した。烏孫に対する漢朝廷の謝罪に見えるが、国内的には泥靡（狂王）の暗殺に失敗したことがかれらの罪名であった。公主は厳しい訊問を受けたが、ただ謝罪しただけで、決して罪を認めなかった。訊問した役人は帰国してから、公主に無礼を働いたとして、死罪に処せられた。副使の季都は医者を連れて行き、熱心に泥靡の治療に当たったので、泥靡から大いに感謝されて帰国した。しかし、泥靡を暗殺する機会がありながら、季都が実行しなかったとい

うことで、宮刑（去勢）に処せられた（『漢書』96下、標点本：3906）。このちぐはぐな感じの事後処理は、漢王朝が下した苦渋の決断を物語る。烏孫と漢の同盟関係の決裂はどうしても避けなければならなかったのである。

懸泉の烏孫簡には、神爵二年（前60）について古い五鳳四年（前54）の紀年簡とその関連の2簡がある（『釈粹』：151, No.215；張徳芳 2005：71, no.19, 図版－簡19；侯旭東 2008：37, no.2；張俊民 2010：107, Nos.37, 38）。

(5) 五鳳四年六月丙寅，使主客散騎光祿大夫□扶承

制，詔御史曰，使雲中大（太）守安国，故教未央倉龍屯衛司馬蘇于武彊，

使送車師王，烏孫諸国客，與軍候周充国載屯俱，

為駕二封軺伝，二人共載。（上欄）

御史大夫延年下扶風

廄，承書以次為駕，

當舍伝舍，如律令。（下欄）（Ⅱ T0113③：122：251A）

翻訳：五鳳四年（前54）六月丙寅（27日），行主客散騎馬・光祿大夫□扶が承制し，御史に詔（みことのり）する。「使雲中太守安国，故教未央倉龍屯衛司馬蘇，于武彊が使者となり，車師（トルファン）王と烏孫諸国客の帰国を送っていく。軍候の周充国，載屯が同行する。かれらのために四頭立て二人乗りの馬車（二封軺伝）を供与せよ。」（上欄）

御史大夫杜延年が下扶風廄に命ず。「この文書を受領すれば，以下，関係機関は順次同様に，馬車，宿泊，食事の便宜を規則どおりに供与せよ。」（下欄）

注釈：引用者によって釈文が異なる。最新の張俊民は「下扶風廄」を「大司馬」とする。

(6) □□□年□月庚申，使烏孫長羅侯臣惠承

制，詔侍御史曰，惠與軍校尉史留□□

為駕二封軺伝，載従者一人。（上欄）

御史大夫延年下扶風廄，承書以次

為駕，當舍伝舍，従者，如律令。（下欄）（Ⅱ T0115③：415；張俊民 2010：no.38）

翻訳：（五鳳四）年（六）月庚申（21日）使烏孫長羅侯の臣（常）恵が承制し，侍御史に詔（みことのり）する。「常恵と軍校尉史留□□とともに…。かれらのために四頭立て馬車（二封軺伝）を供与し，従者一人を載せよ。」（上欄）

御史大夫の杜延年が扶風廄に命ず。「この文書を受領すれば，以下関係機関は順次同様に，馬車，宿舍，食事，従者の便宜を規則どおり供与せよ。」（下欄）

注釈：上記二簡に登場する御史大夫杜延年の在任期間は五鳳三年（前55）から甘露二年（前52）であるので，無紀年の第2簡も同時期の関連する簡である（張俊民 2010：111，簡38）。

さて，烏孫侍子を送り返すという口実で烏孫に使者を送り込み，烏孫王泥靡の暗殺を企てるという計画は失敗に帰し，漢と烏孫との関係は一層悪化をたどり，破局寸前に至った。上に引用した二簡がはたして暗殺事件と事後処理の使者たちに直接かわるものであるかどうか

か確実とは言えない。刺客を送り込んだ年月が『漢書』をはじめとする文献に明示されていないからである。しかし五鳳四年（前54）はその後の事態の進展と矛盾せず、むしろふさわしい年代である。ただ、木簡に記される人名は『漢書』西域伝に述べられる使者たちの人名と一致しないので、多く送り込まれた使者たちの一部の記録が残ったと考えておきたい。

烏孫公主解憂には、不本意ながら泥靡（狂王）の妻となるなど、焦りがあったのかもしれない。新公主が烏孫入りを果たそうとして、翁歸彌の突然の死によって、敦煌で立ち往生した時、もともとこの婚姻に反対していた漢の重臣の蕭望之は「解憂公主は烏孫に四十余年いたのに、夫婦仲は悪く、辺境に安寧をもたらすことがなかった。烏孫との婚姻には効果がないことは明らかである」と、すぐに引き返すことを主張した。宣帝はそれに従った。しかし取り残された解憂公主はどうすればよいのか。解憂公主には烏孫に降嫁した時からつき従っていた気丈夫な馮嫫という侍女がいた。彼女は史書を読み、西域の事情に通じ、解憂公主の使者となって西域諸国を巡回したこともあり、馮婦人とも呼ばれていた。当時は烏孫の右大将の妻となっており、右大将は烏就屠と懇意であった。烏就屠とは翁歸彌とその匈奴妻の間に生まれた子である。詳しい事情は明らかではないが、この烏就屠が一部の国人の支持を得て兵を集め、泥靡（狂王）を襲撃して殺害し、烏孫王と自称した。その年が甘露元年（前53）であった（王明哲『烏孫研究』1983：92－94）。

このクーデターは漢王朝が予想したものであったかはわからない。ただ、対応は早かった。烏孫国内の混乱に備え、破羌將軍の辛武賢に一万五千人の軍隊を率いて敦煌に待機させ、運河を通じ、糧食の運送と備蓄をはじめた。一方、烏壘城（輪台）に駐屯していた西域都護の鄭吉は馮夫人をつかって烏就屠に説得させた。「今、漢の軍隊が出撃しようとしている。もしそうならば、あなたが破滅するのは明らか、降伏するにこしたことはありません」と。烏就屠は恐怖を抱き、「どうか私に小昆彌の称号をお与えください」と漢の朝廷に申しでた。そこで宣帝は馮夫人を一度長安に召喚し、直接にその真相について尋問した。そして謁者の竺次と期門の甘延壽を正、副使者として馮夫人を烏孫に送らせた。馮夫人は錦車に乗り、皇帝の使者の符節を持ち、烏孫に帰った。烏孫の赤谷城に烏就屠と元貴靡を招き、烏就屠に「小昆靡（烏孫小王）」、元貴靡には「大昆靡（烏孫大王）」とする皇帝の詔を伝え、それぞれに印綬を下賜した。破羌將軍の辛武賢は敦煌に待機していたが、出撃することなく帰還した。烏孫問題はこれでようやく漢朝に有利な形で決着を見た。

懸泉漢簡には馮夫人が烏孫と長安を往来したことを示す木簡が少なくとも二簡みついている。

(7) 甘露二年四月庚申朔丁丑，樂官令充敢言之。詔書以騎馬助伝馬，送破羌將軍，穿渠校尉，使者馮夫人。軍吏，遠者至敦煌郡，軍吏晨夜行，吏御遂馬前後不相及，馬罷亟，或道棄，遂索未得，謹遣騎士張世等以物色，遂各如牒，唯府告部，縣官旁郡，有得此馬者以與世等。敢言之。（V 92DX T1311④：82；『文物』2009－9：93，no. 24；『釈粹』：140，no. 199）

翻訳：甘露二年（前52）四月庚申朔丁丑（18日），樂官（酒泉郡の県名）令の充が申し上げ

ます。「詔書により、騎馬用の馬を（不足する）伝馬として使用し、破羌將軍、穿渠校尉および使者の馮夫人を送迎することになり、軍吏ははるばる遠く敦煌にまで随行いたします。軍吏たちは馬車を御し、馬を駆るのに、道中の前後で人数が不足がちであり、馬も疲労困憊し、馬の中には途中で放棄されるものもあり、あとで捜し当てようとしても見つかりません。騎士の張世等を派遣され、馬を搜索させるようにお願いします。詳細は添付文書（牒）に記したとおりです。どうか郡府は部、官、旁郡に通告し、もしそれらの馬を見つけた者があれば、張世等に渡すようにと。」以上申し上げます。

注釈：甘露二年（前52）四月になって、破羌將軍辛武賢の軍隊の撤退、烏孫公主侍女の馮夫人の長安召喚などが重なって、烏孫と長安間を往復する使者の動きは急に頻繁となり、その通過地点あたりの懸泉置やその前後の駅伝施設は慌ただしくその対応に追われた。とくに従者や馬の員数が不足し、上記のような陳情書になったとおもわれる。

(8) 甘露二年二月庚申朔丙戌、魚離置嗇夫禹移懸泉置、遣佐光持伝馬十匹、為馮夫人柱（駐）、廩穡麥小三十二石七斗、又茭廿五石二鈞。今寫券墨移書到、受簿入、三月報、毋令謬、如律令。（Ⅱ T0115③：96；『釈粹』：141, no. 200）

翻訳：甘露二年（前52）二月庚申朔丙戌（27日）、魚離置嗇夫の禹が懸泉置に伝達する。「佐光に伝馬十匹を持たせて派遣するので、馮夫人の乗車用の馬にあてよ。また穡麥小三十二石七斗と茭二十五石二鈞を支給する。今、その明細書の写しを送付するので、それが到着すれば、出納簿に記入し、十月に報告せよ。誤りなく、規則どおりにせよ。」

注釈：甘露二年二月27日付のこの簡の内容は、馮夫人が長安に出向くための準備である。同様な準備作業に関わる懸泉木簡として、ほかにも次のような簡がある。

(9) 上書二封 其一封長羅侯

一烏孫公主 甘露二年二月辛未日夕時、受平望駅騎當富、懸泉駅騎朱定、付萬年駅騎。

（Ⅱ T0113③：65；張德芳 2000-9：94, No. 25；『釈文』：137, no. 193；張俊民 2010：121, No. 119）

注釈：長羅侯常恵と烏孫公主がそれぞれ漢の皇帝に宛てた書簡が懸泉置を経由して伝達されたことを示す検箋である。懸泉の西隣りの駅、平望駅から懸泉駅にリレーされ、その日付は甘露二年二月辛未（12日）であったと記録される。ついで懸泉置（駅）から東隣の駅、萬年駅へと運ばれていく。みな騎馬による伝送である。四月の馮夫人の長安への通過の二か月前のことであり、その事前連絡に関する内容であろうか。つぎの簡も同様か。

(10) 使烏孫長羅侯恵、遣斥候恭上書、詣行在所、以令為駕一乘伝。甘露二年二月甲戌、敦煌騎司馬充、行太守事、庫令賀兼行丞事、謂敦煌、以次為（駕）、當舍伝舍。如律令。

（Ⅴ T1311③：315；張德芳 2000-9：94, No. 26；『釈粹』：142, No. 201；藤田勝久 2010：76, No. 12）

翻訳：烏孫へ使者となった長羅侯常恵が斥候の恭を派遣して皇帝に書簡を奉る（上書）。「恭

は朝廷（長安）にまで赴くので、令に従って乗馬一頭（あるいは一頭立て馬車）を供与せよ。甘露二年二月甲戌（15日）敦煌騎司馬充が太守の事務を代行し、庫令の賀が丞の事務を兼行して敦煌に命ずる。「関係機関は順次同様にして規則どおりに宿舍、食事を供与せよ。」

注釈：上の簡とほとんど変わらない日付であるが、この簡が数日後発である。しかしその伝達は長羅侯の命じた人物（斥侯の恭）が駅ごとに馬をとりかえて、長安にまで急行し、長羅侯常恵の書簡を皇帝のもとに届けるのである。

最後に公主外交の結末をのべてこの章を終えよう。『漢書』西域伝下によると、解憂公主の子の元貴靡と鴟靡（泥靡＝狂王との間に生まれた子）が病死すると、公主は宣帝に上書し、帰国させてほしいと願い出た。「年老土思，願得歸骸骨，葬漢地。（年老いて故郷が恋しく，烏孫公主の身を解かれ，漢地に葬りたい）」と。天子は憐れんで帰国を許し，公主は烏孫の孫男女三人を連れて長安に帰還した。その年は甘露三年（前51）であった。公主は七十歳に近かった。皇帝は公主としての田宅，奴婢を下賜し，なに不自由なく余生を送らせた。朝見儀式も公主に準じた待遇が与えられた。その後二年して公主は死没し，三人の孫たちが留まって，その墳墓を守ったという（『漢書』96下，標点本：3908）。烏孫公主が長安に帰国するさいも，やはり懸泉置を経由した。以下二件の木簡が見つかった。

(11) 甘露三年十月辛亥，丞相属王彭，護烏孫公主及將軍，貴人，從者，道上伝車馬為駕二封軺伝，有請詔。御史大夫萬年下謂成（渭城）。以次為駕，當舍伝舍，如律令。

（V 92 DXT1412③：100；『釈粹』：No. 195；張徳芳 2005：簡25，図版；侯旭東 2008：40，No. 21）

翻訳：甘露三年（前51）十月辛亥（1日），丞相属官の王彭は烏孫公主および將軍，貴人，從者を護衛する（ために烏孫へ赴く）。道中の馬車は二頭立てとする。制詔を申請した文書の添付がある。

御史大夫の陳萬年が渭城（右扶風府の属県，咸陽付近）に命じる。「以下の関係機関は順次同様にして，馬車，食事，宿舍を規則どおりに供与せよ。」

注釈：烏孫公主の一行が長安に帰るのを護衛する役人王彭に発給された伝信（身分証明と通行許可の文書，パスポート）である。制詔（皇帝の認可）を承けて発給される伝信ではなく，制詔の申請段階で中央政庁の御史から発給されるタイプの伝信である。「有請詔」，「以請詔」の文言が入るタイプの伝信簡については，侯旭東 2008：28を参照されたい。

(12) 甘露三年十月辛亥朔，淵泉丞賀移廣至，魚離，懸泉，遮要，龍勒，廐畜夫昌持伝馬送公主以下過，稟穰麥各如牒，今寫券墨移書到，受簿入，十一月報，毋令謬，如律令。

（II 90DXT0114③：522；『釈粹』：142，No. 202；『研究』：236，簡30；侯旭東 2008：14，例3）

翻訳：甘露三年（前51）十月辛亥朔（1日），淵泉県の丞賀が廣至，魚離，懸泉，遮要，龍勒の各置に文書で伝達する。「淵泉置の廐畜夫の昌が伝馬を持参して烏孫公主を送迎して，（上記の補給地を）通過することになり，文書（牒）に記されたとおり，各置に穰麥（まぐさ）を支給する。今，文書の写しを送るので，文書が到着したならば，出納簿に記入し，十32 (105)

一月に報告せよ。規則どおり、誤りがないようにせよ。」

注釈：二件の木簡は同一の日付の発給であるが、(11)は中央の御史大夫が発給したもの、(12)は敦煌郡の東端の淵泉県が発給したものである。しかし、いずれも烏孫公主解憂が皇帝の許しを得て帰国することをうけて発給されたものであり、それらの出迎えの準備を受けて公主は帰国する。帰国の日付は『漢書』西域伝によれば、甘露三年（前51）であるので、10月になって長安から護衛の役人を派遣していることを考えると、公主の長安帰着は早くても12月になったのではないかと想像される。

Ⅲ 大月氏とその五翕侯の使者

懸泉漢簡のうちの月氏簡に次いで烏孫簡を取り上げた。烏孫資料のあまりにも豊富なことから、多くのページを費やしてしまった。その意図したところは、烏孫が匈奴と手を切つて、漢と同盟関係に入ってから、大月氏を含めた西域諸国の中国への往来が容易になったと考えたからである。

ところで、大月氏の使者には、大月氏王から派遣された使者と、大月氏の五翕侯がそれぞれ独自に派遣した使者の両様があるのは、懸泉漢簡によって初めて知ることができた歴史情報であった。翕侯の実態はつかみにくいが、史記、漢書によれば匈奴や烏孫にも翕侯の名称があり、遊牧民族社会における支配体制に関わる名称であろう。突厥の葉護（yabghu）と同じであり、独自の支配地域と民衆を率い、同族の大王、単于、可汗などから半ば独立した部族集団の長を呼ぶものと考えられる。康居伝では「康居有小王五、……凡五王属康居。」（『漢書』西域伝、康居条）とあり、小王が翕侯に相当するものであろう。少し長くなるが、『漢書』西域伝、大月氏条の五翕侯に関する原文と翻訳を以下に示す。

大月氏本行国也。随畜移徙，與匈奴同俗。……（匈奴）老上単于殺月氏，以其頭為飲器，月氏乃遠去，過大宛，西擊大夏而臣之，都媯水北為王庭。……大夏本無大君長，城邑往往置小長，民弱畏戰。故月氏徙來，皆臣畜之。共稟漢使者，有五翕侯。一曰休密翕侯，治和墨城，去都護二千八百四十一里，去陽關七千八百二里。二曰雙靡翕侯，治雙靡城，去都護三千七百四十一里，去陽關七千七百八十二里。三曰貴霜翕侯，治護燥城，去都護五千九百四十里，去陽關七千九百八十二里。四曰胘頓翕侯，治薄茅城，去都護五千九百六十二里，去陽關八千二百二里。五曰高附翕侯，治高附城，去都護六千四十一里，去陽關九千二百八十三里。凡五翕侯，皆属大月氏。（『漢書』西域伝、標点本：3890－91）

大月氏はもともと遊牧民族の国家であり、家畜に随って移動し、匈奴と同じ生活様式であった。……匈奴の老上単于が月氏王を殺害し、その頭骨で酒杯をつくった。そこで月氏は遠くへ逃れ去り、大宛（フェルガナ）を通過し、西のかた大夏国（アフガニスタン北部）を攻撃し、征服した。媯水（オクサス河、アムダリヤ）の北（岸）に都をおいて、王庭とした。……大夏にはもともと大君長がおらず、往々にして城邑ごとに小君長が存在した。大夏の住民は弱体で、戦闘を恐れた。それゆえ月氏が遷移してくると、大夏の住民を臣従させてし

まった。漢の使者が訪れると、食糧を供給してくれるのは、つぎの五翕侯である。一は、休密翕侯であり、和墨城を治所とし、西域都護から2841里、陽関から7802里の距離にある。二は、雙靡翕侯であり、雙靡城を治所とし、都護から3741里、陽関から7782里の距離にある。三は、貴霜（クシャン）翕侯であり、護澡城を治所とし、都護から5940里、陽関から7982里の距離にある。四は、肸頓翕侯であり、薄茅城を治所とし、都護から5962里、陽関から8202里の距離にある。五は、高附翕侯であり、高附城を治所とし、都護から6041里、陽関から9283里の距離にある。それら五翕侯はみな大月氏に所属する。

以上の文章うち原文3行目まで、つまり「大月氏本行国也……為王庭」までは『史記』大宛伝大月氏条からの引用であり、つぎの「大夏本無大君長……皆臣畜之」までは、やはり『史記』大宛伝大夏条からの引用である。特に最後の「皆臣畜之」は『史記』では「皆臣畜大夏」とあり、したがって『漢書』の文章を「皆臣畜之、共稟漢使者」（大夏は……いずれもみな臣従して月氏を養い、ともに漢の使者に糧食を供給した—小竹武夫訳『漢書』下巻、筑摩書房 1979：342）と、大夏が主語であるかのように読むのは誤りである。「……皆臣畜之」までが『漢書』に先行する司馬遷『史記』の文章であったので、そこで一度文章を区切った方がよい。そしてつぎの「共稟漢使者……」から始まる文章こそ、班固『漢書』の固有の文章であり、それが大月氏五翕侯に関する情報なのである。ではどのように読むか。

私の提案する読み方は、「共稟漢使者、有五翕侯。一曰休密翕侯……（ともに漢の使者に食糧を供与するものには、次の五翕侯がある。第一は休密翕侯……）」と続ける。「者」は使者の者ではなく、上のことは「共稟漢使（漢使に食糧を供与する）」を名詞化し、主格化する助字である。漢の使者を「漢使」と表現することは『史記』大宛伝では一般的であり、『漢書』西域伝においても、「漢使」が「漢使者」とならんで用いられている¹⁾。

『史記』大宛伝では、オクサス河（鳩水、現アム・ダリヤ）の南に居住する「大夏」と北に居住する「大月氏」との伝が併記されていたが、『漢書』西域伝では大月氏に征服された「大夏国」の独立した伝記はない。上に述べたように文章の主語は大月氏であり、五翕侯がもともと大夏に属したものの、あるいは大夏人が設置したものと解釈することはできない。その点では、『後漢書』西域伝、大月氏条が「大月氏が大夏を征服し、その国を五翕侯に分割し、支配した（分其国為……五部翕侯）」という文章は、後世のものながら、必ずしも『漢書』西域伝のそれと矛盾せず、史実をゆがめる記述でなかったといえる²⁾。

1) 小谷仲男 1992「クシャン王朝勃興史に関する新資料—ティリア・テペの黄金遺宝—」：24、注16、なお同じ読み方は私より以前に、江上波夫編 1986『中央アジア史』山川出版社：239-243において提唱されていた。

2) Chavannes 1907：189-190；桑原隲蔵 1916「張騫の遠征」：全集第三巻 pp. 288-9；羽田亨 1930「大月氏及び貴霜に就いて」：論文集上巻 pp. 542-3；Thierry 2005：463-69。これらは『後漢書』の述べる「大月氏の五翕侯」の記述は誤りで、『漢書』の「大夏五翕侯」が正しいとする。中国史料の批判としては一歩前進にみえたが、そのさきの見通しがなかった。その点で、新出の同時代史料、懸泉漢簡が「大月氏雙靡翕侯」、「大月氏休密翕侯」と記し、「大夏」と記していないことは、たいへん示唆的である。

漢王朝にとって、大月氏の五翕侯への関心は、漢の使者が大月氏あるいはそれ以遠まで赴くときに、沿道で食糧、宿泊、交通手段が確保できるかどうかが問題であり、その情報を必要とした。懸泉置で大月氏の使者たちが接待を受けたように、漢の使者が大月氏王の領内や各翕侯の領内で同様な接待が確保される必要があった。それに合わせ、西域都護からそれぞれの補給地までの距離、つまり大月氏翕侯の詳細な距離、日程などの情報も必要であったわけである。ではいつからこのような互恵関係が成立したか。すでに述べてきたことから明らかのように、そのような状況が整うのは、早ければ西域都護の設置（前59）、遅ければ烏孫の漢への帰順（前52）以降のことであった。実際に雙靡翕侯の使者が懸泉漢簡に記録されたのは永光元年（前43）、休密翕侯の使者は建昭（前37）であった。『漢書』西域伝の大月氏五翕侯に関する情報は意外に遅い時期のものであった。

む す び

懸泉漢簡の大月氏17簡がその写真とともに出版された時（張徳芳 2004）、いち早くフランスの F. Grenet が反応し、Nouvelles données sur la localisation des cinq *yabghus* des Yuezhi, JA 294 (2006) の論文の中で取り上げた。焦点は大月氏と五翕侯との関係、および大月氏五翕侯の地理的分布に関してであった。しかし今回の懸泉漢簡は大月氏五翕侯の分布や位置について直接ヒントを与えるものではなかった。もし、懸泉漢簡で示されたような前漢王朝と大月氏・五翕侯との間の使節往来をあとづける考古学上の例証を挙げるとすれば、アフガニスタン、ティリア・テベ出土の中国製銅鏡（漢字銘34文字、連弧文清白鏡、径17.5cm）3面であろう。ティリア・テベの位置はアフガニスタン北部、シバルガンにあり、Grenet の予想する大月氏五翕侯の位置とはかけ離れるが、漢王朝から大月氏使者に下賜される品として、銅鏡の意義とその製作年代（前漢末）はふさわしくおもわれる（小谷仲男 1992：5）。

欧米ではじめて懸泉漢簡の大月氏使者に言及した Grenet の論文は、2013年12月5－7日、ベルリンで開催された Symposium on literary sources on the history of the Kushans（主宰者 H. Falk）においても話題になった。事前配布された「大月氏・クشان史の編年資料 Collection of literary sources on the history of the Kushans」には、「前43年、雙靡翕侯の使者、前37年、休密翕侯の使者」として書き込まれていた。シンポジウムの席上で、私は『漢書』西域伝、大月氏国条の「漢使に食糧を供給するのは、つぎの五翕侯である。（共稟漢使者、有五翕侯。…）」という新しい読み方を提案した。それに対して会場から、懸泉漢簡の大月氏翕侯の使節接待の記録と、その新しい読み方とは呼応するものであり、その読み方を支持するという意見が出され、大方の賛同が得られた。私も心強くおもった（小谷仲男 2014）。ただ、大月氏の五翕侯が大月氏に所属することは明らかとしても、それだけで翕侯が人種的に見て大月氏と同一民族といいきれない。この問題を解決しないと、大月氏＝クشان（貴霜）人とすることはできない。同時に、ガンダーラ美術と深いかわりを持つク

シャン王朝の性格が十分に理解できなくなる。私はかつて『大月氏』の中で苦し紛れに、大月氏には二つの顔があると書いた。匈奴に破れて、西方アフガニスタンまで移動した大月氏、それと大月氏五翕侯のひとつ、貴霜翕侯の丘就卻（クジュラ・カドフィセス）が他の四翕侯を併合して建国したクシャン王国（『後漢書』西域伝大月氏）、それらを依然として中国側は大月氏と呼び続ける大月氏の両者である。それがはたして同一系統の民族なのか。私の現在の結論は両者がいずれもアフガニスタンの遊牧民族を母体とする同一民族の歴史上の活動であったと考えるに至っている（小谷仲男 2010：225；2013）。今回とりあげた懸泉出土の木簡はまさに大月氏の同時代史料であり、示唆に富み、今後の研究の進展を期待したい。

最後になったが、この小論を作成するに当たり、出土漢簡の取り扱いに不慣れな私の質問に丁寧に対応してくださった京都女子大学の松井嘉徳教授、京都大学人文科学研究所の宮宅潔准教授にお礼を申し上げる。

参考文献

- 王明哲、王炳華（1983）『烏孫研究』新疆人民出版社。
- 甘肅省文物考古研究所（2000）「甘肅敦煌漢代懸泉置遺址發掘簡報」，「敦煌懸泉漢簡内容概述」，「敦煌懸泉漢簡積文選」『文物』2000－5：4－45。
- 胡平生・張德芳編（2001）『敦煌懸泉漢簡積粹』上海古籍出版社。（略号：『積粹』）
- 郝樹声・張德芳（2009）『懸泉漢簡研究』甘肅文化出版社。（略号：『研究』）
- 張德芳（2000）「長羅侯費用簿及長羅侯与烏孫關係考略」『文物』2000－9：91－95。
- 張德芳（2004）「懸泉漢簡中若干西域資料考論」『中外關係史：新史料与新問題』科学出版社：147－129。
- 張德芳（2005）「懸泉漢簡中的伝信簡考述」『出土文献研究』第7輯：65－81。
- 侯旭東（2008）「西北漢簡所見伝信与伝一兼論漢代君臣日常政務的分工与詔書・律令的作用」『文史』2008－3：5－53。
- 張俊民（2008）「敦煌懸泉漢簡所見人名綜述（三）——以敦煌太守人名為中心的考察」『簡帛研究2005』：116－144。
- 張俊民（2010）「敦煌懸泉漢簡所見人名綜述（四）——以中央機構職官為中心的考察」『簡帛研究2007』：99－128。
- 張俊民（2012）「懸泉漢簡廩嗇夫廩佐人名綜述」『甘肅省第二屆簡牘學國際學術研討會論文集』：175－199。
- 江上波夫編（1986）『中央アジア史』山川出版社：239－243。
- 小谷仲男（1992）「クシャン王朝勃興史に関する新資料——ティリア・テベの黄金遺宝——」『富山大学人文学部紀要』第18号：1－26，注16。
- 小谷仲男（1999）「シノ・カロシュティ貨幣の年代——附録『後漢書』西域伝訳注——」同上，30号：17－48。
- 小谷仲男（2010）『大月氏——中央アジアに謎の民族を尋ねて』新装版，東方書店。（初版第一刷發行1999）
- 小谷仲男（2013）「バクトリア語文書に現れるアフガン人」『第20回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』：83－91。
- 小谷仲男（2014）「クシャン史シンポジウムに参加して：2013年12月，ベルリン——大月氏からクシャン王朝へ——」『第21回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』（2014年12月出版予定）
- 桑原隲藏（1916）「張騫の遠征」『統史的研究』（『桑原隲藏全集』第3巻，岩波書店1968：261－

- 351所収).
- 富谷至 (2010) 「通行行政—通行証と関所」『文書行政の漢帝国—木簡・竹簡の時代』名古屋大学出版会 2010.
- 羽田亨 (1930) 「大月氏及び貴霜に就いて」『史学雑誌』41-9, (『羽田博士史学論文集』上巻, 東洋史研究会1957: 538-561 所収).
- 藤田勝久 (2010) 「漢簡に見える交通と地方官府の伝」『愛媛大学法文学部論集』人文学科編29: 73-100.
- 宮宅 潔 (2005) 「懸泉置とその周辺—敦煌～安西間の歴史地理—」『古シルクロードの軍事・行政システム—河西回廊を中心に—』シルクロード学研究紀要22: 99-129.
- Chavannes, E. (1907) Les pays d'occident d'après le Heou Han Chou, *T'oung Pao* 8: 149-234.
- Grenet, Frantz (2006) Nouvelles données sur la localisation des cinq *yabghu* des Yuezhi. L'arrière plan politique de l'itinéraire des marchands de Maës Titianos. *Journal Asiatique* 294.2: 325-341.
- Hill, J. E. (2009) *Through the Jade Gate to Rome. A study of the Silk Routes during the later Han dynasty 1st to 2nd centuries CE. An annotated translation of the Chronicle on the Western Regions from the Hou hanshu*. Book Surge.
- Hulswé, A. F. P. and Loewe, M. A. N. (1979) *China in Central Asia: the Early Stage 125 BC-AD 23: an annotated translation of chapters 61 and 96 of the History of the Former Han Dynasty*. Leiden.
- Sims-Williams, N. (2007, 12) *Bactrian Documents from northern Afghanistan I-III*. The Nour Foundation, London.
- Thierry, F. (2005) Yuezhi et Kouchans. Pièges et dangers des sources chinoises. In: Osmund Bopearachich ed., *Afghanistan ancien carrefour entre l'est et l'ouest*. Brepols: 421-539.